

吟遊詩人

口ずさみつつ歩く泥濘の道

(もう一篇も詩は生まれまい・・・)

草原に満ちる古い歌を背負い
夜にも灯りは持たず
還る、 　　ただひたすらに帰る

(この広さはどうだ・・・)

知り尽くして後の放浪に
全てが音楽と絵画と情緒である
何もなく、全てが存在する

(・・・・・・)

忘却を欲した時に迫って来る無力
微風は寂しく頬を撫で
古い歌の中から人のぬくもりを感じる

(不可能だったか・・・)

歩み去る人影の肩は落ちて
やがて草の上に座り込む
驚くべきか、表情ひとつ変えず
刀を取り出して切り落としはじめる
自らの手、足、耳・・・・・・

知り尽くして後の放浪に
全ては音楽と絵画と情緒である
何もなく、全てが存在する

(1983.8.11)